

山形大学附属博物館，地域貢献のために

— 特別展・公開講座報告 —

森谷 菜穂子・高橋 加津美・丸山 俊明

(山形大学附属博物館)

はじめに

山形大学附属博物館（以下当館と記す）では通年の事業として、特定のテーマに沿った「特別展」と一般市民を対象とした「公開講座」をそれぞれ年に一度開催している。近年、大学法人化にともなって当館にも地域貢献や社会連携の課題が課せられている。このような社会背景や学内環境の変遷のもと、昭和50年代から30年以上にわたって継続されてきたこれらの事業も一大転機を迎えることとなった。本稿は、初めて学外との連携において行なわれたこれらの事業について報告するものである。開催概要については文末の**図表1・2**にまとめたのでご参照願う。平成19年度の開催当初から3年間、ただただ無我夢中で振り返る暇もなかったが、ここで一区切りつけて反省することによって、高等教育研究機関のひとつであると同時に、地域に開かれた社会教育施設を目指す当館の課題が明らかになると思われる。

1. 特別展—初めての学外連携

a. 「五百澤智也展」

当館の「特別展」は、所蔵資料を部門別に配置している通常の「常設展」とは異なり、特定のテーマに沿って資料を配置、来場者に何らかの知的メッセージを伝えることを目的としている。昭和50年以降の開催状況を**図表3**（入場者数の経年推移は**図表5**を参照）に示した。その多くが10日間程度の会期で、例年平均400人ほどの見学者を迎えている。本館の所蔵資料を中心に構成され、キャンパス内の一室で開催されるという場合が常であった¹。

ところが、平成19年度の特別展の開催は当館に

とって初めてづくしのこととなった。前年度のうちに千葉県在住の山岳地形学者・鳥瞰図作家、五百澤智也氏（山形市出身）から当館学芸研究員の八木浩司教授（地域教育文化学部）を通じ、非常勤講師として縁のある山形大学で自身の作品展をしたいとの申し込みがあった。また、時を同じくして五百澤氏の同級生であった日野顕正氏（財団法人山形県生涯学習文化財団理事長）から、作品展を山形県郷土館（文翔館）で開催したいという意向が打診された。これらのことより、五百澤智也氏の作品展は山形大学附属博物館と県生涯学習文化財団との共催で行なわれることとなり、資料は千葉県立中央博物館と五百澤氏個人から借用、その作品の多さと山岳分野の地域性から2カ年に渡って開催されることとなった。

連携先の山形県郷土館は県生涯学習財団の管理下にあり、「文翔館」の愛称で親しまれている（以下文翔館と記す）。山形市の中心部に位置し、大正5年完成当時の姿をそのまま残す旧県庁舎および県会議事堂は国指定重要文化財となっており、観光スポットとしても有名である。五百澤展の会場となったのは、レンガ造り3階建ての旧県庁舎2階部分にあたり、通常は貸しギャラリーとして一般市民にも人気の高い4室をすべて続きの間に設えての展示となった。

五百澤氏は地学系の研究者、または山岳関係者の間で知名度が高く、郷里での初個展ともあって市民からの期待は大きかった。その作品は空中写真を立体視し、すべて手書きで書きおこす方法で描かれ、学術的な成果のみならず精緻で細かい描写は一般の目からみても大変美しいものである。専門性が高いことから展覧会の監修は、八木学芸研究員に一任さ

れることとなった。また、2ヵ年の中で一年目は山形大学が、二年目は文翔館が主となり企画することで計画がスタートした。

展示室はこれまでの学内開催で経験してきた部屋の4～5倍のスペースである。また、パネルの作成はこれまで自前でやっていたとはいえ、A1判、B1判という大きさは経験がない。ましてや当館のプリンターで印刷するのは不可能であった。そこで八木学芸研究員の計らいで、インク・紙代を当館が負担し、地域教育文化学部地学研究室の印刷機を借用することとなった。大学で作成したパネルを会場に移動するのは文翔館と本学の大型公用車を使用し、数回に分けて搬入した。当館の展示ケースも同様に搬入し、両館のスタッフ総動員で会場は設置された（写真1、2）。

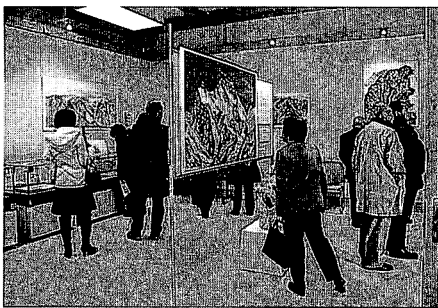


写真1 平成19年度特別展導入部分



写真2 平成20年度特別展初日
八木学芸研究員によるギャラリートーク

特殊用紙、インク、パネル代などに加え、千葉県から作品を運ぶための輸送費が計上された。また、打ち合わせや輸送時立会いのための旅費、五百澤氏本人の旅費と滞在費、会場監視員の賃金…これらすべては通常の予算でまかないきれない。そこで初年度は財団法人カメイ社会教育振興財団の助成を仰ぎ、また次年度は文翔館側で予

算を確保していたため、当館は大きな赤字は出さずに済んだ。また、共催の事業であったため通常のギャラリー借り上げ料は無料であった。もしこれが本館のみの企画だったらその借用費すら出せずに計画段階で頓挫していたことだろう。

さて、この展覧会の目玉は大型の展示だけではなかった。兩年共、同じく国指定重要文化財の建物である旧議会議事堂ホールを会場にした記念シンポジウムを企画し、文翔館主催の企画展では例年行なわれていることだが、当館にとってはこれもまた初めての経験である。

初年度は展示のテーマが「日本アルプスとヒマラヤ」だったため、五百澤氏の他に、氷河地形について語れる専門家が必要だった。そこで八木学芸研究員のアドバイスで立教大学観光学部教授の岩田修二氏や、本学からは人文学部長（当時）の阿子島功氏を講師として招くことになった。オムニバス形式での講義であったが多くの聴衆が会場を埋め尽くし、その数230人。これは議場ホールにとっても記録的な出来事だったようだ（写真3）。

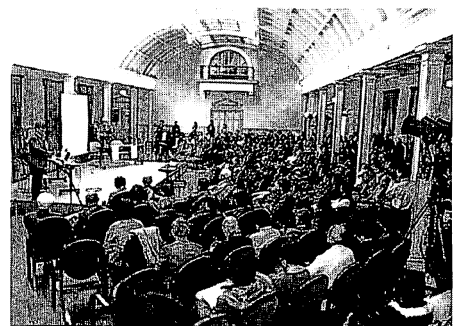


写真3 平成19年度記念シンポジウム会場

次年度は「ふるさとの山々をみんなで語る」というテーマであった。地元の山岳愛好家の中から、田宮良一氏（日本山岳会会員）、鈴木雅宏氏（元山形県立山形工業高等学校校長）といった方々が八木学芸研究員のコーディネートの下、五百澤氏を囲んで公開討論するという形式である。これも175人もの市民が聴講し、質疑応答の時間には客席と五百澤氏との間で活発で温かな会話が交わされた。両年のアンケートの中では、これら初の試みを歓迎する声が多く、大きな手ごたえを感じ

た企画であった。

また、平成 19 年度は博物館の企画とリンクした形で、小白川キャンパスにおける五百澤氏の講義が行われた。八木学芸研究員の申請で教養教育課外講座として採択されたものだが、学内の担当者からは「本当に学生たちが集まるのか？」と心配する声が聞かれた。しかし講義当日、教養教育 2 号館 221 教室は一般教育科目履修者を中心とした 223 名の聴講生で埋め尽くされた。展覧会に関心を持つ学外者も若干含まれていたとは言え、これだけの人数の学生が（教養教育の一環とはいえ）博物館の事業に関わったのは初めてのことである（写真 4）。



写真 4 平成 19 年度教養教育課外講座

これまで当館が授業カリキュラムの中で利用される機会が全くなかったわけではない。例えば近年は教養教育カリキュラムの中で、学内共同利用施設の見学の一環として多くの学生が当館を訪れている。人文学部では所蔵資料の古文書を解読する授業も行なわれてきた。そして人文・地域教育文化・理の 3 学部で毎年開講されている「博物館実習」²は博物館が会場となっている。しかし博物館が主体となった事業の中で具体的に授業と関連することはほとんどなかった。博物館には現在 8 名の学芸研究員が学部との兼任で在職されている。先生方の知恵をお借りすれば、博物館教育の可能性は無限大であるとあらためて学ぶ機会となった。

この 2 年間の連携で学んだことは、上記のことや他館との折衝、大きなパネルの作成方法だけではない。これまで当館の特別展ではたった 2 名の博物館員と学生アルバイトが交代制で会場案内

を務めるのが常であった。ところが文翔館では市民ボランティアの制度があり、通常 100 名を越える人材が自ら進んで登録、館内ツアーなどの案内人として職員の他に常時待機している。会期が 1 ヶ月半と長期間に渡った平成 20 年度は、そのボランティアの方々が大きな戦力となってくださった。

実は当館にもボランティア制度はある。ただ、大きく公募することはできず、現在 5 名の方が自ら登録し、現在古文書史料整理を中心にご尽力いただいている³。なぜ公募に至らないか。それはボランティア制度を運営するための人的な、そしてスペース上の余裕がないからである。ボランティア制度は館内ツアーや会場監視員として大きな戦力になるだろう。地域社会への貢献度も大きい。ところがどの館でも設けているボランティア研修制度はどう整備していけばよいのか。展示室でも物が溢れかえっているような現状なのに、せっかく来ていただいたボランティアの方々はどこで待機すればよいのか。これらの課題が解消されない限り、安易な公募はできない。

他館との連携において目の当たりにしたさまざまなボランティア制度をお手本として、当館にとっても、ボランティアの方にとっても双方にメリットのある有効な制度の開発に真剣に取り組まなければならないと考えさせられた出来事であった。

b. 平成 21 年度特別企画展

「雨宮透作品展～キャンパスの風～」

前々年度から 2 年間続けて大成功を収めたおかげで、平成 21 年度の特別展は企画立案から相当なプレッシャーとなった。しかも運営費の削減により平成 21 年度の予算は大幅に縮小されてしまった。例年の資料購入・修復予算は前年度見積もった額を半分以上削らざるを得ず、古文書史料目録作成のための資料整理賃金は確保できなかった。そんな状況下で例年のような特別展のための予算は絶望的であり、早急に何らかの対策を考える必要があった。

そんな中、平成20年度をもって地域教育文化学部を退職される雨宮透教授の個展の話が持ち上がった。彫刻を専門とする雨宮氏は博物館運営委員を務められ、かつ博物館実習の講師をご担当くださるなど当館との縁は深い。また、当館では歴代美術教員の作品を収蔵してきたが、それは本学美術教育の歴史を広く周知し後年に伝える目的がある。前年には、新収蔵資料としてインフォメーションセンターの博物館展示品コーナーに雨宮氏の彫刻作品《漣（レン）・風》が設置されたばかりであった。

雨宮氏のご好意で個展は当館の「特別企画展」として開催することとなった。「企画展」と銘打ったのには訳がある。まだ今年度の「特別展」が開催可能かもしれない……という淡い期待と強い願望があったからだ。また、雨宮氏はブロンズやFRPというプラスチック樹脂を使った彫像で広く知られているが、その話が持ち上がったとき、氏はちょうど市内のギャラリーでドローイングを中心とした個展を開催されていた。彫刻家のドローイング展は珍しく、美術を学ぶ学生にとっても格好の学びの場となる。そこで本展では学内での個展という特徴を表に出し、キャンパス内で制作した作品を中心に展示することになった。

なにより有り難かったのは、雨宮氏のご退職後も非常勤講師として大学に残られており、研究室の学生たちが会場設置や案内を手伝ってくださるということだった。また、デリケートな扱いを要する美術作品は美術専門の業者に委託し、特殊な梱包を施した上で美専車と呼ばれる特別車両による運搬方法が求められるものだが、これも館員の梱包と公用車でのご搬入をご快諾いただいたのである。ポスターとチラシは手作り、別途DMハガキも作成、あとは地道に広報することで低予算でも開催できる見込みが立ったのである（写真5）。

会場は小白川図書館2階閲覧室を区切って使用した（写真6）。平成18年度まで会場としていた図書館1階会議室は改修工事のため他の目的に使用されており、ある程度スペースに余裕のあった

2階閲覧室をなんとか融通していただいた。ここは夜間の閉館時にはパーテーションで区切れることから、作品の設置や管理に相応しいと考えたからである。市内ギャラリーでのロコミや、テレビとラジオで紹介されたことで県内外から多くの見学者が訪れた。一部の図書館利用者から「見学者の声が気になる」といった苦情もあったものの、アンケートのうち学内者からは「今まで見る機会がなかったが、図書館利用と一緒に気軽に見学できた」という声、また学外者からは「図書館という知的な空間の中で芸術に触れることができた」「大学図書館は敷居が高くて入る機会がなかったのよかった」という声があった。ライブラリーギャラリーとしては、すでに館内の至る所に地域教育文化学部美術教室の学生の作品が展示されている。それをさらに推し進めたかのような今回の試みは、市民に開かれた大学図書館としての可能性を探りつつ、閲覧室とギャラリーの一体化を模索した点で大きく貢献できるものだったと自負している。



写真5 平成21年度
特別企画展ポスター



写真6 平成21年度特別企画展会場の様子

この展示会の運営は雨宮氏と学生たちのご尽力によって実現した。学生たちは先生の作品に文字通り触れることで学ぶ好機となった。実作に携

わっているため見学者からの技術的な質問にも答えられる。また将来、自ら作品展をするときのヒントにもなるだろう。このような学生たちが現場に登場することで彼らにもご来場の方々にもメリットのある企画展となった⁴。

c. 平成 21 年度特別展「毒地社とその時代展」

大盛況に終わりつつも、平成 21 年度の特別展はこれで終わりでもいいのだろうか、という気持ちが拭えないでいた時、思いがけず小白川事務局から地域社会貢献事業に資するための予算をいただけたという話がきた。とはいうものの例年の特別展とほぼ同額の執行と知らされ、予算の範囲で急遽企画することとなった。

夏季期間中は博物館実習のためほとんど身動きがとれず、漠然と絵画展をしなくては…と考えるにとどまっていた。その理由は平成 19 年に理学部から管理換えになった絵画資料のお披露目をまだしていなかったことにある。版画・書を含む計 7 点の美術資料の中には大別すれば二つの宝物が含まれていた。一つは明治から昭和初期にかけて活躍した洋画家、^{みつたにくにしろう}満谷国四郎の作品、もう一つは旧制山形高等学校時代に遡り、大正時代に地元で活躍した洋画グループ「毒地社」メンバーの作品 2 点が含まれていたことである。

前者は損傷が激しかったため、平成 20 年度、地域教育文化学部の小林俊介准教授の研究プロジェクトにおいて修復調査の題材として取り上げていただけることとなった。平成 21 年 3 月には報告書も刊行され、資料はいつでも展示公開できる状態にあった。

一方後者の「毒地社」は、山形近代美術史の中で「山形で初めての公募洋画展を開催した若者を中心としたグループ」という位置づけがなされ、関係者の間ではある程度知名度はあったが、作品を目にする機会もなければ名前が一般に知られているとは言いがたく、企画することには一抹の不安があった。しかし、「毒地社」メンバーの中には本学の前身である山形高等学校の学生や山形師範学校の図画教師が含まれており、地元近代

美術の歴史においても、大学の沿革にとってもこの機会に「毒地社」を紹介することには大きな意味があると考え、企画に踏み切ることになった。満谷作品は旧制山形高等学校に縁の深い同時代作品（参考作品）として展示することで決着した。

9 月末より「当館で毒地社を紹介する展覧会をやりたい」と声を挙げたことで次々と情報が集ってきた。大きな収穫は、当時のポスターや作品などの展示について財団法人山形美術館や本学 OB より作品借用の快諾を頂けたことである。「毒地社」の名付け親である為本自治雄氏のご子息、^{なめもとゆきはる}為本六花治山形大学名誉教授から多くの資料提供があったことも幸運であった。また、思いがけずメンバーのご遺族に面会できたことは展覧会を企画する上でも大きな励みとなった。作品や情報を提供してくださる方が口を揃えて「大学博物館らしい良い企画だ」「協力しましょう」とおっしゃってくださったのである⁵（写真 7）。



写真 7 平成 21 年度
特別展ポスター

かくして「毒地社とその時代展」は雨宮展と同様に図書館 2 階閲覧室で開催された。学内開催の特別展で、学外から資料を借用したばかりか土日まで開館するのは初めてである。会場設営と案内のお手伝いは博物館実習受講生の中から希望者を募った。博物館や美術館における正課の実習として展覧会の補助を体験学習することはそれほど珍しくはない。ただ当館では、授業カリキュラムとしてそこまで準備が整っておらず、また例年の実習時期と展覧会時期が合わないためにほとんどその経験がないままとなっていた。博物館活動にある程度関心があり、実務についても学習済みの博物館実習修了生が登録する「学生ボランテ

「IA組織」のようなものを育成していきたいと念じている。今回は試行的に何人かの学生にあらかじめ登録してもらい、都合のつく日にお手伝いに来てもらうことができた。

また、会期中は人文学部と地域教育文化学部のゼミ見学があり、レポートが課されるとあって熱心にスケッチや質問をする学生が多かった。地域教育文化学部の小林准教授は教養の授業でも「毒地社展」を宣伝してくださり、結果的に入場者数の大部分が本学学生という結果となった。これでひとまず「山形大学の歴史を知ってもらう」「若者に毒地社という存在を知ってもらう」という当初の目的は達成されたと感じている。

「毒地社」は大正11年当時、20代の若者たちを中心として結成されたグループである。山形高等学校が現在の小白川キャンパスの地に新築され、近代教育への目覚めに沸いていたところに同世代の若者が描いた作品を、今の学生たちが目にしたことに大きな意義があったのではないだろうか。もっとも、アンケートでは「毒地社」という名前に関心をもった学生が多かったが…（写真8）。



写真8 平成21年度特別展、学生見学の様子

2. 公開講座一大好評！山形美術館シリーズ

特別展と同様、公開講座は地域貢献に寄与する目的で昭和56年から開講されている（図表4参照）。初回「生活とエネルギー」では当時の広根徳太郎学長も講師に迎え、84名の市民が参加したという記録が残っている⁶。それから約25年、当館単独の事業が続いた後、平成18年に、山形美術館と東北芸術工科大学との連携で始まったのが「山形美術館の傑作たち」シリーズである。

当時の館長であった元木幸一人文学部教授の専門が西洋美術史だったことから、「美のトライアングル」と名づけられたこの構想は、二大学の講師陣（美術史家たち）が山形美術館の作品を題材にして講義（競演）するという形式で、あたかも三角形の頂点を結びつけるイメージの元の実現した。結果的に、本学の元木前館長と阿部成樹学芸研究員（人文学部教授）、小林俊介地域教育文化学部准教授の3講師は平成21年度まで続いたこの企画4回すべてにご登壇いただくこととなったのだが、当初は4年も連続する事など全く予想もしていなかった。

山形美術館は日本でも屈指のフランス近代絵画のコレクションを展示している美術館である。与謝蕪村や高橋由一、岸田劉生といった日本美術の大家、地元出身の新海竹太郎、椿貞雄、小松均といった作家らの作品も収められており、まさに傑作ぞろいの美術館である。これらの実物を間近にして専門家の講義が受けられるという公開講座は、美術館等で一般に行なわれているギャラリートーク以上に美術愛好者にはたまらない魅力だったようで、当館始まって以来のロングランとなった。同時に、高校生や大学生から一般の方々を受講対象者としたのだが、50名の定員を3度も（第3回を除いて）オーバーするという博物館公開講座始まって以来の快挙を成し遂げた。さらに、受講修了時の例年のアンケートでも次年度に期待するものとして「学外での開講を続けて」や「美術館もの」を熱望する声が多くなり、結果的にリピーターを7割方確保しながらの連続企画となったのである（写真9、10）。

要望に応じて、同じ趣旨の講座を続行する事は「市民のニーズに応えている」という面では評価できるかもしれない。しかし、既に発案者（前館長）は任期を終えられており、講師を担当してくださる先生方に負担をかけているという危惧からも3年目、4年目の開講は熟考せざるを得なかった。当館は総合博物館であり、特定の分野のみ特化した企画を続けることで他分野がおろそかにならないだろうか…。図表6の「受講生の

経年推移」を見ても分かるとおり、受講生数を確保できる人気講座だからこそ、上記のジレンマに館員は頭を悩ませた。タイトルも「山形美術館の傑作たち」から「美術館でアートに親しむ」に変え、『これで最終章ですよ』と宣伝時からアピールすることで市民の声に支えられながらの人気講座は平成21年度のパート4をもって一時休止と相成った。



写真9 平成20年度公開講座、会場風景

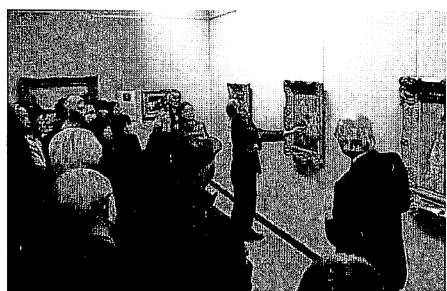


写真10 平成21年度公開講座、会場風景

3. この3年間を振り返って

この3年は当館の二大事業である特別展と公開講座のいわば転換期だったのかもしれない。特別展、公開講座ともに他館との連携企画が不成功を収めた。数字やアンケートから手ごたえを感じつつも、同時に次年度の企画のハードルが高く険しいものになったことは否めない。例えば平成21年度の特別展は結果的に年に2回の開催と機会に恵まれたが、たまたま幸運がもたらされたに過ぎず、これを毎年続けることは人的にも財政的にも非常に難しいだろう。また、公開講座の定員数も再考の必要がある。平成22年度は、植物をめぐる企画を理学部の横山潤学芸研究員のもとで検討している。その内容や場所を鑑みても、これま

で以上の受講生数を右肩上がりの数字として経済指標のごとく期待すること自体が無意味なものであり、当館としてはあくまでもアカデミックなバックグラウンドを堅持し醸成する心構えでありたい。

しかし大きな収穫もあった。学内のみでは考えられなかった大きな会場での企画が他館との連携で実現した。また授業と連動する事によって博物館実習につぐ「博物館教育」の場が誕生した。学内の先生方に利用していただくことで、これまで思いもつかなかった新しい企画が実現するかもしれない。博物館学という分野は広範囲に及んでおり、学内施設として博物館を設置している大学が少ないことから、他の大学博物館でも博物館教育のプログラムは千差万別である⁷。これからの展望として、学芸員養成課程の高度化や厳格化と相俟って、大学教育カリキュラムにおける博物館利用をこれまで以上に試行模索する時期が来ているのかもしれない。

忘れてならないことは学生たちを主役に育てることだ。大学教育の一環として、展覧会や公開講座での重要な戦力となる学生スタッフを養成できるカリキュラムなども必要だ。激化する就職活動も影響してか、学生たちは社会教育施設などでのボランティアを希望する傾向にある。単にその場を提供する以上に、学生が主体的に学習に取り組める活発な教育の場として博物館が機能する仕組みを考えなくてはいけないだろう。

当館は小さな博物館だが、所蔵資料の価値の高さや歴史的意義などから背負うものは大きい。まして大学改革の荒波にもまれてからは、館の存在価値がこれまで以上に厳しく問われる現実にはさらされている。地道な日常の業務が評価されにくいという今日、そこをいかに疎かにしないで発展していけるかが今後の大きな課題といえよう。

おわりに

本稿をまとめるにあたって上記事業に携わった方々に厚く御礼申し上げます。五百澤智也先生並びに千葉県立中央博物館、山形県生涯学習財団

の日野頭正理事長をはじめとする職員の皆様、公開講座と特別展の両方でお世話になった山形美術館の加藤千明館長をはじめとする館員の皆様に心より深謝申し上げます。また貴重な作品をお貸しいただいた雨宮透先生、蜂屋孝司様、逸見義一様、奈良村正明様にもこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

元木幸一前館長、八木浩司学芸研究員、阿部成樹学芸研究員、宮島新一先生、小林俊介先生、山本陽史先生、東北芸術工科大学の諸先生方のご発案とご指導なくてはこれらの企画は成り立ちませんでした。全員のお名前をここに挙げることはできませんが、お手伝いくださった学生の皆さん、そして当館スタッフの先生方、応援してくださった皆様にあらためて感謝と御礼申し上げ、この稿を終えたいと思います。誠にありがとうございました。

註

- 1 会場は中央図書館1階会議室（当時）を使用。例外として、平成17年度はインフォメーションセンターを会場とした。
- 2 博物館実習については下記の事例報告を参照。丸山俊明・森谷菜穂子・高橋加津美 2009「キャンパス共通科目としての博物館実習」『山形大学高等教育研究年報』第3号、20～33頁。
- 3 平成22年3月、ボランティア第1号の石島庸男元山形大学名誉教授のご尽力によって古文書史料目録31号が刊行された。石島氏は平成21年11月にご逝去された。ここに記して感謝申し上げます。
- 4 特別企画展終了後、雨宮教授のご好意でドローイング作品1点が当館に寄贈されたこともここに申し添える。
- 5 特別展終了後、あるご遺族から出品作品1点が当館に寄贈されたこともここに申し添える。
- 6 平成17年度（本学工学部米沢キャンパス）、平成19～21年度以外は、中央図書館1階会議室（当時）を会場に開催した。
- 7 先進的な例として、北海道大学教育GP「博物館を舞台とした体験型全人教育の推進」といった例がある。

参考文献

山形大学附属博物館 1980～2010 『山形大学附属博物館報』7～34号。

山形大学附属博物館 1993 『山形大学附属博物館40年のことども』。

財団法人山形県生涯学習文化財団 2008 『五百澤智也の世界』。

財団法人山形県生涯学習文化財団 2008 『五百澤智也特集 山形新聞連載「ふるさとの自然」昭和63年～平成15年』。

満谷国四郎《白石島》調査および保存修復プロジェクト（編）2009 『満谷国四郎《白石島》調査および保存修復報告書』山形大学地域教育文化学部小林研究室。

※ なお、ここで報告した特別展・公開講座の様子は当館ホームページでも見ることができる。

<http://www.lib.yamagata-u.ac.jp/museum/>



QRコード（携帯サイト用）

図表1 ここ3年間の特別展の開催状況

年度	タイトル・日程	概要・イベント
平成 19年度	「五百澤智也の世界 part 1 山に学び山を描く ー日本アルプス・ヒマラヤを中心に」	<p>山形市出身の山岳研究家・鳥瞰図作家、五百澤智也^{いおざわ}氏の作品展。本学地域教育文化学部の八木浩司教授の監修の下、山形県郷土館 文翔館（県生涯学習文化財団）との共催で開催された。</p> <p>入場者数 4,200 人、記念講演 223 人、シンポジウム 230 人</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 記念講演 山形大学教養教育課外講座 11月30日（金）16:30～ 山形大学小白川キャンパス教養教育棟 ・ 記念シンポジウム「山地の地形景観を読むー山形・日本アルプス・ヒマラヤー」 12月8日（土）14:00～16:00 文翔館旧県会議事堂議場ホール
	12月1日（土）～12月23日（日） 月曜休館（月曜が祝祭日の場合は翌日休館） 9:00～16:30 会場：文翔館 ギャラリー5～8 入場無料	
平成 20年度	「五百澤智也の世界 part 2 五百澤智也が描くふるさとの山々」	<p>前年度に引き続き、文翔館との共同主催。Part 1 が日本アルプスやヒマラヤを中心にした作品の展示だったのに対し、県内の山々を中心に展示した。昨年度に引き続いて会場は地元の観光・文化施設であり、そのことも多くの集客につながった。</p> <p>入場者数 6,643 人、シンポジウム 175 人</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ オープニングセレモニー 平成 20 年 10 月 25 日（土）13:00～ 文翔館会場 ・ 記念シンポジウム「ふるさとの山々をみんなで語る」 平成 20 年 11 月 23 日（日）14:00～15:30 文翔館旧県会議事堂議場ホール
	10月25日（土）～12月14日（日） 月曜休館（月曜が祝祭日の場合は翌日休館） 9:00～16:30 会場：文翔館 ギャラリー5～8 入場無料	
平成 21年度 (特別企画展)	「雨宮透作品展～キャンパスの風～」	<p>平成 20 年度で地域教育文化学部を退職した彫刻家、雨宮透氏のドローイングを中心とした展覧会。学生と共にキャンパス内の樹木を描いたものや、作家の代表作品のモチーフでもある貫頭衣を描いたものなど、彫刻 2 点を含めた合計 21 点を展示した。テレビ・ラジオなどで取り上げられ、県外からも来場者があった。入場者数 403 人</p>
	5月18日（月）～6月5日（金） 土日休館 8:45～17:00 会場：本学小白川図書館 2 階閲覧室 入場無料	
平成 21年度	「毒地社とその時代展」	<p>大正 11 年、山形で若者たちを中心として結成された洋画グループ「毒地社」を紹介する展覧会。山形師範学校教諭や山形高等学校の学生などがメンバーに含まれていたため、学内にも作品が残されていた。油絵を中心として市内外から集められた作品 23 点が展示された。</p> <p>入場者数 528 人</p>
	11月9日（月）～20日（金） 8:45-17:00（土日は 11:00 開場、最終日は 14:00 まで） 会場：本学小白川図書館 2 階閲覧室 入場無料	

図表2 ここ3年間の公開講座の開催状況

	タイトル・日程	講義内容
平成 18 年度	「山形美術館の傑作たち — 6 美術史家の競演」	・「クールベ《ジョーの肖像》について」 (人文学部助教授 阿部 成樹)
	11月4日(土), 11日(土), 18日(土) 13:30~17:00 受講者数:54(定員50名)	・「ロダン《永遠なる休日の精》」 (東北芸術工科大学芸術学部教授 篠塚 千恵子) ・「椿貞雄《道》について」(地域教育文化学部助教授 小林 俊介) ・「ピカソ《マリー・テレーズの肖像》」 (東北芸術工科大学助教授 安發 和彰) ・「新海竹太郎作《聖観音像》について」 (東北芸術工科大学助教授 長坂 一郎) ・「ピーチの憂愁…ルノワール《桃》と静物画について」 (人文学部教授 元木 幸一)
平成 19 年度	「山形美術館の傑作たち Part 2」	・「故郷の最上川を描く」(山形美術館館長 加藤 千明) ・「ミロの風景画」(東北芸術工科大学芸術学部准教授 安發 和彰)
	11月17日(土), 24日(土), 12月1日(土) 13:30~17:00 受講者数:58(定員50名)	・「蕪村の内なる芭蕉」(大学院理工学研究科教授 山本 陽史) ・「冬のゴッホ」(人文学部教授 元木 幸一) ・「マネ《イザベル・ルモニエの肖像》」(人文学部准教授 阿部 成樹) ・「近代絵画, 萬(よろず), 引き受けます — 萬鉄五郎《かなきり声の風景》について」 (地域教育文化学部准教授 小林 俊介)
平成 20 年度	「山形美術館の傑作たち Part 3」	・「関西のあじわい」(地域教育文化学部教授 宮島 新一)
	11月15日(土), 22日(土), 12月6日(土) 13:30~17:00 受講者数:48(定員50名)	・「シャガール 夢と現(うつつ)」(人文学部教授 元木 幸一) ・「人間・新海竹太郎の魅力」(山形美術館館長 加藤 千明) ・「《サンタンリ村から見たマルセイユ湾》について」 (人文学部准教授 阿部 成樹) ・「筆先の魔術師 葛飾北斎—《北斎漫画》を中心に」 (大学院理工学研究科教授 山本 陽史) ・「ルノワールの技法について」 (地域教育文化学部准教授 小林 俊介)
平成 21 年度	「美術館でアートに親しむ」	・「彫刻に触れよう」(元地域教育文化学部教授 雨宮 透)
	11月28日(土), 12月5日(土), 12日(土) 13:30~17:00 受講者数:54(定員50名)	・「背面の美」(人文学部教授 阿部 成樹) ・「鮭をめぐる話」(地域教育文化学部准教授 小林 俊介) ・「山形城の杉板戸」(地域教育文化学部教授 宮島 新一) ・「本を読む女」(人文学部教授 元木 幸一) ・「山形美術館のコレクションの成り立ち」 (山形美術館館長 加藤 千明)

図表3 特別展タイトル一覧

年度	特別展タイトル
H21	毒地社とその時代展
H21	雨宮透作品展～キャンパスの風～
H20	五百澤智也の世界 Part2 「ふるさとの山々」
H19	五百澤智也の世界 Part1 「山に学び山を描く」
H18	美の再発見物語：山形大学編
H18	1 学部部門1 プロジェクト(山大文化財リサーチ・プロジェクト)成果報告展 「菊子と牡丹と風景と」
H17	土よりいでのものたち
H17	1 学部部門1 プロジェクト(山大文化財リサーチ・プロジェクト)成果報告展「椿貞雄《菊子遊戯之図》を探索」
H16	江戸時代の商い
H15	江戸時代の旅いろいろ
H14	明治の記憶－三島県令道路改修記念画帖をひもとく－
H13	キャンパスのなかのキャンパス
H12	山大博物館のお宝
H11	人と動物は「いま・・・」
H10	古文書でたどる武士の世界
H9	地図で見る山形
H8	山形の地場産業と技術の流れ
H7	郷土作家による和の様式美
H5	日本の思想と美
H4	花と文化
H3	環境と生活
H2	川と文化展
H1	山と生活展
S63	食と文化展
S62	光と生活展
S61	水と文化展
S60	中条家文書展
S59	明治の山形
S58	土と生活展
S57	収蔵資料展
S56	生活とエネルギー展
S55	雪と生活展
S54	木の文化展
S53	最上徳内資料展

S52	最上川渡し場歴史展
S51	中条家文書展
S50	羽州海藤檣下宿歴史展

※ 昭和 45～49 年度は、小規模展示のため昭和 50 年度以降の「特別展」と区別し、ここには挙げていない。

※ 昭和 56 年度は小白川キャンパスと工・農学部巡回展示を実施した。

※ 入場者数の経年推移は図表5を参照。

図表4 公開講座タイトル一覧

年度	公開講座タイトル
H21	美術館でアートに親しむ
H20	山形美術館の傑作たち Part 3
H19	山形美術館の傑作たち Part 2
H18	山形美術館の傑作たち－6 美術史家たちの競演
H17	科学の創造・芸術の発明
H16	商いの博物学・古銭からマネーゲームまで
H15	旅の博物学・観光、巡礼、渡り鳥
H14	やまがた・明治の風景を読み解く
H13	20 世紀をふり返る・科学と芸術の 100 年
H12	愛と性の博物学
H11	人間と動物・新しい関係をさぐる
H10	山形たんけん隊 2
H9	山形たんけん隊
H8	山形の地場産業と技術の流れ
H7	博物館に遊ぶ
H5	日本の思想と美
H4	花と文化
H3	環境と生活・都市
H2	川と文化
H1	山と生活
S63	食と文化
S62	光と生活
S61	水と文化
S59	明治の山形
S58	土と生活
S57	博物館に学ぶ
S56	生活とエネルギー

※ 受講者数の経年推移については図表6を参照。

